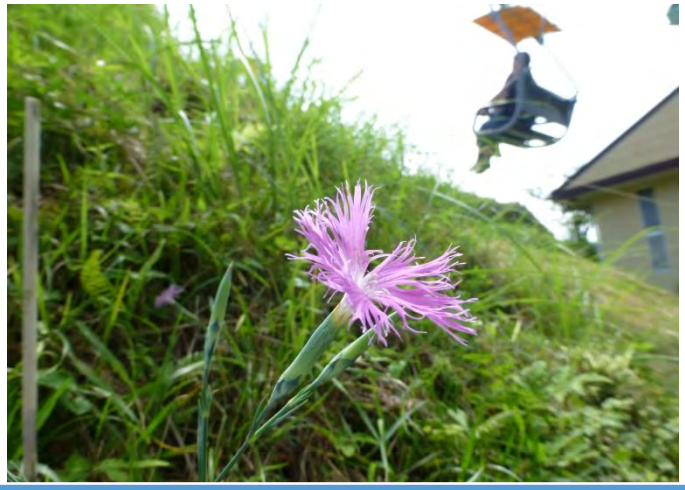

大室山の植物たち

資料提供

伊東自然歴史案内人会

http://ito-guide.on.arena.ne.jp/

アキカラマツ（キンポウゲ科、カラマツソウ属）
堤防、草地などに生育し、高さ１m以上になる。７月から秋まで黄白色の花を咲かせる。キンポウゲ科の植物には光輝く花弁を持つものが多い印象があるが、アキカラマツの花は地味であり、花弁のように見えるのは萼である。花弁がないので、多数の長い雄しべがよく目立つ。
キンポウゲ科の植物は有毒なものが多いがアキカラマツも全草が有毒。

アキノキリンソウ（キク科、アキノキリンソウ属）
秋に総状の黄色い花を咲かせる。その様子からアワダチソウともよばれる。近縁ノセイタカアワダチソウは河原や空き地をあつかましく黄色一色で埋め尽くす北アメリカ原産の花であるが本種は物静かな日本美人の感がする。高山にはミヤマアキノキリンソウがある。

アキノタムラソウ（シソ科、アキギリ属）
多年生の草本。山際の道端、畦道、刈り取り草原などにごく普通に生育している。やや日照が制限された場所に多く、刈り取りにも耐える。葉は３枚の小葉からなることが多いが、変異は大きい。秋に咲くイメージの名前が付けられているが、６月の梅雨のさなかから開花しはじめ、初秋まで花が続く。シソ科独特の４角形の茎である。

ウツボグサ（シソ科、ウツボグサ属）
花穂が矢を入れる靫（うつぼ）に似ていることから命名されている。唇形花が密についている。花期は初夏であるが晩夏には枯れてしまうので夏枯草（かこそう）の異名がある。漢方では利尿剤として利用されている。

エビヅル（ブドウ科、ブドウ属）
蔓性の落葉樹である。秋には実が青黒く熟す。食べると甘酸っぱくておいしい。よく似たノブドウとの違いはエビヅルの葉は裏が白っぽいのに対してノブドウの葉の裏は緑である。またノブドウの実は大きさや色の変化が大きくて食べるのは不適である。雌雄異株。

オオバヤシャブシ（カバノキ科、ハンノキ属）
空中窒素の固定能力があるので、治山や肥料木として用いられた。カバノキ科の植物は風媒花であり、大量の花粉を飛散させる。オオバヤシャブシは近年花粉アレルギーの原因となることが判明し敬遠されつつある。実ははじめは緑だが次第に黒くなる。独特の黒い実は華道で使われることも多く、草木染では黒染めに用いられ、またお歯黒の染材としても使われた。

オカトラノオ（サクラソウ科、オカトラノオ属）
１ｃｍぐらいの星形の白い花が茎先に多数つけるがそれが虎の尾に似ているという。
花は下から順に咲き上がる。花茎が途中から折れ曲がっているが結実する頃には直立する。よく似たヌマトラノオの花茎は折れ曲がることはない。

オトギリソウ（オトギリソウ科、オトギリソウ属）
ススキ草原や林縁などの草地に生育する。茎は高さ 50cm ほどになり、断面は丸い。夏から初秋にかけて直径 2cm ほどの黄色い花を付ける。花弁・萼には黒点と黒線がはいる。弟切草、秘伝の薬草を他人に教えてしまった弟を兄が切った時の返り血がこの黒点であるという伝えがある。止血・傷薬などに薬効があるとされる。

オトコエシ（オミナエシ科、オミナエシ属）
オミナエシ（女郎花）と対比させてつけられた名前で，オミナエシに比べて強壮な感じがする。山野によく見られる多年草で実に翼状の丸い小苞が付いている。
オミナエシは黄色の花を咲かせるがオトコエシは白い花である。漢字では男郎花。

オミナエシ（オミナエシ科、オミナエシ属）
秋の七草の一つである。名前の「オミナ」は「美しい女性」の意味であり、同属のオトコエシに比べて弱々しいからである。昔の子供たちはままごとでこの花を器に盛ってご飯（黄な粉ご飯）に見立てていた。漢字では女郎花と書く。
　全国の草地や林縁に普通な植物であったが、近年は少なくなった植物の一つである。

カセンソウ（キク科、オグルマ属）
細い茎の先に数個の鮮やかな黄色の花を咲かせる。根生葉は鱗片状で花期にはない。
長楕円状披針形の葉の裏面は葉脈は隆起して目立っている。よく似たオグルマの葉脈は隆起していない。

カワラナデシコ（ナデシコ科、ナデシコ属）
秋の七草のひとつ。淡紅紫色の五弁花は先の縁が糸状に裂けている。葉は細長くやや粉白色を帯びている。
名の通り河原にも生えているが日当たりのいい草地にも多く見ることが出来る。

キキョウ（キキョウ科、キキョウ属）
青紫の鐘形花を開いている。花冠の先は五裂する。秋の七草のアサガオは本種とされるが初夏から咲き始める。根は漢方で咳止めや化膿止めに用いられる。自生は減少しているが園芸種は多い。

キジムシロ（バラ科、キジムシロ属）
早春から黄色い花を咲かせる。全体が粗い毛に被われている。葉はイチゴ似で艶があり、鋸歯がはっきりしている。花が終わると葉が伸びて丸く広がるが、その様子をキジが座るムシロに見立てている。

ギボウシ（ユリ科、ギボウシ属）
蕾が欄干の擬宝珠に似ていることから名づけられた。大室山にあるのは葉が大きいのでオオバギボウシである。白い花を咲かせるが時には淡紫色のものもある。
昔から食用になっているがよく似た有毒のバイケイソウと間違えるケースがあるようである。

キランソウ（シソ科、キランソウ属）
茎は直立せず地面を這うシソ科植物は通常は茎が四角いが本種は丸い。濃紫色の唇形花は上唇は小さく下唇は大きい。薬草として知られているが病人を地獄へ行かせないようにということでジゴクノカマノフタという異名がある。

クルマバナ（シソ科、トウバナ属）

草丈は数十ｃｍでやや直立する。茎には下向きの毛がある。葉の長さは3～5cmで両面に毛が多い。トウバナはもう少し小ぶりで葉の毛も少ない。花は8月から9月にかけて節に輪生して咲く。「車花」の和名は花の付いている様子からのイメージであろう。これもシソ科独特の４角形の茎である。
アキノタムラソウにも似ているがアキノタムラソウは花が片側を向いている。

ゲンノショウコ（フウロソウ科、フウロソウ属）

昔から下痢止めの薬草として使われてきた。
飢饉の際に食べたところ、下痢が治ったことから、薬草として認められたという。名前の由来は食べるとたちどころに薬効があらわれるということで、「現の証拠」であるという。白、ピンク、赤の花を咲かせる。秋に種子を飛散させた後で果柄を立てた様が神輿のように見えることから、ミコシグサとも呼ばれる。

コウゾリナ（キク科、コウゾリナ属）

茎を直立させて枝分かれした各茎頂にややまばらに黄色い舌状花だけの花を咲かせる。
上部の葉の基部は茎を抱いている。葉と茎には剛毛が生えている。触った感触が男性の髭に似ているので顔剃菜と名付けられた。若い葉は茹でて食べることが出来る。

コガンピ（ジンチョウゲ科、ガンピ属）

落葉性の低木であるが地上の上部は毎年枯れるので大きくならない。和紙の材料にするガンピと違って繊維は弱い。乾燥地を好み、毎年山焼きされて草原を維持される大室山などは生育に適している。花は白く
葉裏の葉脈は網目模様になっている。

コマツナギ（マメ科、コマツナギ属）

草のように見えるが本当は小低木である。馬をつなげるほど茎が丈夫であることから名づけられた。葉のわきに総状花序を出し、蝶形花をたくさんつける。果実は約３ｃｍの豆果である。葉は奇数羽状複葉で７～１３個の小葉からなる。

サルトリイバラ（ユリ科、シオデ属）

名前はサルが引っかかってしまうということであるが実際は人間が引っかかってしまう。明るい林に生育する。葉の表面は光沢があり小麦饅頭や柏餅のカシワの代用になる。
赤い実は葉が落ちてからも残る。葉は光沢があり先端がとがる。

シラヤマギク（キク科、シオン属）

広い意味での野菊の一種。
白色のキク型の花を皿型（散房状）につけるが花弁の数が他の仲間よりもはるかに少なく、花弁と花弁の間に明らかな隙間がある。
下部の葉では１０ｃｍほどの柄があり人の掌ほどの大きな卵心形の葉があるのが特徴のである。

ススキ（イネ科、ススキ属）

高さは１から2m。地下には短いがしっかりした地下茎がある。そこから多数の花茎を立てる。葉は細長く、縁は鋭い鉤状になっているため、皮膚が傷つくことがある。秋の七草のオバナというのはこれである。よく似たオギは湿地の地中に横走する地下茎から地上茎を立ち上げるので、群落を形成していても株立ちすることはない。

スズサイコ（ガガイモ科、カモメヅル属）
葉は長さ7から9cm、幅5から15mmの披針形で対生、斜め上に向かって伸びる。葉にはやや厚みがあって艶がある。チガヤの草原などではその葉と紛れやすいガガイモ科特有の袋果（実）をつける。秋に袋果が割れ、種髪（毛束）をつけた種子がはじける。

スズメノヤリ（イグサ科、スズメノヤリ属）
頭状花序が大名行列に使う毛槍に似ていることでこの名がついている。また、スズメは小さいもののたとえである。(スズメノエンドウなど)
葉の縁に白くて長い毛が生えている。雌しべが先に熟し後になって雄しべが熟す。こういう方法で自家受粉をさける植物もあるのである。

センボンヤリ（キク科、センボンヤリ属）
林立する閉鎖花を千本の槍に見立てている。
閉鎖花とは開花しないままに自家受粉するものであり、受粉の確立性は高いが遺伝子の多様性は望めない。センボンヤリは開放花を咲かせるが秋には閉鎖花を林立させる。

タチツボスミレ（スミレ科、スミレ属）
伊豆では最もよく見られるスミレである。
スミレには地上に茎のあるものとないものがあるが本種は茎がありよく枝分かれして株をつくっている。
ハート形の葉を持ち唇弁には紫の筋が入っている。

タツナミソウ（シソ科、タツナミソウ属）
青紫～淡紅紫の唇形花が同じ方向に一列に並ぶ。その姿が海岸に打ち寄せる波の塔に見えることから立浪草と名付けられた。葉は心形で鈍い鋸歯がある。大室山にあるのは全体に小さく葉に短毛が生えているので正式にはコバノタツナミソウである。

タマアジサイ（ユキノシタ科、アジサイ属）
アジサイは通常は６月を中心に咲くがこの種は８～９月になってやっと咲く。蕾が玉のように丸くなっているのでこの名がある。蕾が順に割れていくにつれて少しづつ花が出てくる。
葉や幹には全体に短毛が生えていてざらつく。

タムラソウ（キク科、タムラソウ属）
アザミに似ているがアザミとは異なり、葉に棘がないので容易に見分けられる。アザミが夏の花なら、タムラソウは秋の花。 名前の由来ははっきりしない。葉は羽状に分裂する。葉の上部では羽片は完全には分裂せず、次の裂片と続くが、中部から基部にかけての羽片は完全に分かれる。
またアキノタムラソウとは名前が似ているだけでまったく別物。

チガヤ（イネ科、チガヤ属）
茎の先に円柱状の花序を出す。花穂には白い絹毛が密集し晩春の日差しを浴びて銀白色に輝く。
赤紫の葯と柱頭が目立つ。若い花序をツバナと呼び口に含むと甘みがある。
線形の葉は硬く縁はざらつく。

チカラシバ（イネ科、チカラシバ属）
田圃のあぜ道や堤防、路傍などによく見られる。
人間が踏みつける場所に生育する植物は根系が発達していることが多く、このチカラシバも引き抜くことが困難なほど、根を発達させている。
この種は犬などの動物の毛の間に入って運ばれ、新天地に生育地を広げる。

チダケサシ（ユキノシタ科、チダケサシ属）
名の由来は食用きのこの乳茸（チチタケ、チダケ）を本種の茎にさして山から持ち帰ったことによる。
長い花穂に淡いピンクの花を密につける。
葉は２～４回奇数羽状複葉である。

ツリガネニンジン（キキョウ科、ツリガネニンジン属）
ツリガネニンジンは山野のススキ草原や溜池の堰堤などに生育する多年草。キキョウなどと共に、秋の到来を感じさせる植物の１つである。
花の色は白から青まで変異がある。
名前は釣り鐘状の花が咲き、大きな根を朝鮮人参に例えたものという。８月～９月に可憐な花を咲かせる。

ツルウメモドキ（ニシキギ科、ツルウメモドキ属）
葉の形や若枝がウメに似ているのでこのような名がついたものである。はじめはツル植物と思えないが成長すると枝に巻き始める。実を包む黄色い皮が裂けて中から赤い実がみえる。華道などに使われることも多い。

ツルニンジン（キキョウ科、ツルニンジン属）
花は８月から１０月に咲き、花冠は緑色に紫褐色の斑がある。雌しべの柱頭は３～５裂する。塊根がチョウセンニンジンに似ているのでこのような名がつけられた。茎は名の通りツル状になって他の植物に巻き付いて伸びる。別名ジイソブは「おじいさんのソバカス」の意味である。地味だがシックな花で床の間には似合いそう。

ツルボ（ユリ科、ツルボ属）
多年生草本。海岸の崖地に生育するほか、土手や田の畦などに普通にみられる。高さ 30 センチ程の花茎を出し、総状花序をつける。花は密につき、淡紅紫色で花被片は６個、雄蕊も６個。
昔は水によくさらしたものを煮て食べたり，粉にして餅を作ったそうである。「ツルボ餅」は、ぜひチャレンジしたい一品である。

ナンバンギセル（ハマウツボ科、ナンバンギセル属）
主にススキの根に寄生する１年生草本である。葉は退化しており，自らは光合成する能力はない。このような植物にとりつかれたススキはいい迷惑である。茎はごく短く、その上に横向きに花を咲かせる姿が、南蛮の煙管（パイプ）を思わせることからこの名前が付いた。

ニオイタチツボスミレ（スミレ科、スミレ属）
形状はタチツボスミレと似ているが花の色は本種の方が濃く中心部ははっきり白い。名の通りかすかな芳香がある。
全体に白い短毛でおおわれている。

ニシキウツギ（スイカズラ科、タニウツギ属）
葉の脇から２～３輪のロート状の花を咲かせる。花は咲き始めは白いが、咲き進むうちに濃いピンクに変わっていく。１本の木に白とピンクの２色の花をつけているので漢字では二色空木。
同じように花の色が変化するものにハコネウツギがある。見分けが難しく、大室山のものはハコネウツギかもしれない。

ノアザミ（キク科、アザミ属）
アザミは秋咲きが多いが本種は春に咲く。紅紫色の花を上向きに咲かせる。互生する葉の縁には鋭いトゲがあり、基部は茎を抱く。総苞片は直立して粘りがある。
花から伸び出ている雄しべを刺激するとしばらくして花粉が出てくる。

ハバヤマボクチ（キク科、ヤマボクチ属）
茎は直立し、高さ 1～1.5 メートル、黒紫色を帯びる。色が濃いので咲いている時でも枯れているかのように見える。葉は根生葉中心で大形、卵形で、長さ 20～35 センチメートル、裏面に白色の綿毛が密生する。茎葉は互生し、茎上部が分枝し、その先に大きな頭状花をつけ、下向きに開く。
名前は山の草刈り場（葉場）に生育することから。

ヒオウギ（アヤメ科、アヤメ属）
高さ１ｍぐらいの葉が扇状に広がる。オレンジ色の花には赤い斑点がある。六枚の花びらは放射状に開いている。京都の祇園祭では必ず飾られているが、この花はもともと悪霊退散に使われていたということである。
種は黒くぬばたまと呼ばれ、和歌では黒の枕詞である。

ヒキヨモギ（ゴマノハグサ科、ヒキヨモギ属）
葉はヨモギの葉に似て羽状の葉が深く三裂し、先端の葉はさらに三裂する。また、下部の葉は対生なのに上部は互生である。
黄色の唇弁花を咲かせ、上唇は先端が褐色の鎌形で、下唇は横に広く３裂し、中唇弁はシワがあり２裂する。萼は細い筒状で先端部は深く５裂する。

ヒメオドリコソウ（シソ科、オドリコソウ属）
群生することが多く密に積み重なった葉がぐるりと茎を取り巻き人形が立っているように見える。
上部の花は赤紫になる。葉には鋸歯があり網目状のくぼんだ葉脈があり、もむと嫌なにおいがする。
ヨーロッパ原産で明治時代に帰化した。

ヒヨドリバナ（キク科、ヒヨドリバナ属）
和名はヒヨドリの鳴く頃に咲くからであるという。
同じ属であり、秋の七草の一つであるフジバカマは中国原産の帰化植物であるとされている。
山道の路傍や草原などに広く生育する。葉の形などには幅広い変異がある。花の色はフジバカマが赤紫に対しこの花は白い。
フジバカマ同様アサギマダラの好む花である。

フジバカマ（キク科、ヒヨドリバナ属）
秋の七草の１つ。各地で栽培されているが、自然状態における生育地としては、湿った場所であり、時折攪乱されるような場所である。
花がそっくりのサワヒヨドリには葉柄がないことによって区別できる。ヒヨドリバナとは、葉がやや厚く、表面に光沢があって裏面に腺点がない点で区別される。

ヘクソカズラ（アカネ科、ヤイトバナ属）
葉や実をもむと嫌なにおいを出すので名づけられた。つる性で他物に絡みつきながら伸びる。
白い花の真ん中がほんのり赤く、こちらはかわいらしい。花の形がお灸に似ているのでヤイトバナともよばれている。

マツムシソウ（マツムシソウ科、マツムシソウ属）
通常はブナ帯などの山地草原に生育する。美しい淡青紫色の花を咲かせ、草原の秋をいろどる。多くの花が集まった頭状花を形成する。花は筒状で花冠の先端は５つの裂片に分かれ、周辺の花は３つの裂片が大きく外側に伸びる。マツムシソウの名前の由来は、マツムシの鳴く頃に咲くからであるとのこと。

マルバハギ（マメ科、ハギ属）
山の尾根筋やハゲ山などに生育する。葉は３小葉からなり、葉柄が比較的短いので、茎近くに重なって付く傾向がある。小葉は丸みを帯びている。花は８月から10月にかけて咲き、花序が伸びないので、葉と同じ長さ以下になる点は、本種の大きな特徴の１つである。

ミツバツチグリ（バラ科、キジムシロ属）
葉は３枚の小葉からなり、花茎に黄色い５弁の花を咲かせる。花後、四方に走出枝を伸ばして増える。よく似たキジムシロの葉は本種に比べて艶があり羽状複葉である。

ムラサキケマン（ケシ科、キケマン属）

山麓や道端のやや湿ったところに生える越年草。華鬘とは仏間の欄干にかける飾りのことである。花は茎の上部にびっしりとつく。
同族のキケマンはもっと大型で花は黄色い。

ヤマホタルブクロ（キキョウ科、ホタルブクロ属）

ホタルが飛ぶころに花を咲かせる。花の中にホタルを入れて楽しんだという説もある。色は白から薄紫までさまざまである。大室山にあるのはヤマホタルブクロであり副萼片が発達していない。ホタルブクロはそれが発達している。

ヤマホトトギス（ユリ科、ホトトギス属）

山野の林下や林縁、崖や傾斜地などの、日当たりの弱いところに自生する。葉脈は縦方向で、表面には毛が生える。普通のホトトギスとの違いは花びらの折れたところに斑紋が入らず、花びらが反り返るところで判別できる。

ホトトギスの名の由来は斑点のある花弁がホトトギス（鳥）のおなかの模様に似ているからである。

ヤマユリ（ユリ科、ユリ属）

日本特産でユリの仲間で最も大きい。反り返った花被片は白色の地に赤褐色の斑点と黄色いすじが入る。芳香が強く斜め下向きに咲く。鱗茎は美味で精進料理に使われる。

ヤマラッキョウ（ユリ科、ネギ属）
やや湿潤な草原に生育する。湿地の周辺にも見ることが出来る。根は食用のラッキョウに似ているが味にまろやかさがなく食用には向かない。晩秋にネギ坊主のような花を咲かせる。色は紫色で大変美しい。

リュウノウギク（キク科、キク属）
野菊と総称されるものの一つでヨメナやノコンギクなどより遅い晩秋に山道などに白い花を咲かせる。葉は３裂することが多く表面には微毛が生えている。香りが香木の龍脳に似ていることから名づけられた。

リンドウ（リンドウ科、リンドウ属）
明るいススキ原や山道脇などに生えることが多い。晩秋の紅葉のころから霜が降りるころにかけて紫の花を咲かせる。秋の七草に選ばれてもよさそうな美しい里山の花だが開花時期が遅いということもあって除外されたと思われる。

ワレモコウ（バラ科、ワレモコウ属）
一見するとバラ科に見えない。
田園地帯の路傍や山地の草原などに生育する。地下に太い根茎があり、これから根生葉を生じる。初夏に茎を出して高さ 1m ほどになり，上部は枝を出してそれぞれの先端に穂状の花序を形成する。花序は暗紅色で、上部から咲き始める。花弁はなく、萼片は４枚で暗紅色、漢字では吾亦紅。